



チューブ・サラーン（カンボジア人）

●自己紹介●

みなさん、こんにちは。これから少し長い自己紹介をしたいと思います。どうぞ、最後までお付き合いして頂けたらうれしいです。

改めまして、私の名前はチューブ・サラーンといいます。5歳のときに両親と兄2人、日本に来ました。国籍はカンボジアです。カンボジアは東南アジアに位置しており、周りにはタイ、ベトナム、ラオスの三国に囲まれています。季候は一年を通してとても暑い国です。そのためか、国民の肌の色も私と同じように小麦色をしています。季節は雨季と乾季しかありません。お米がとても育ち、うまく行けば年に3回もお米を育てることができます。カンボジアには有名は世界遺産があり、その名はアンコールワットと言う遺跡です。ほぼ毎週すたんどばいみーの為に運転手として陸前高田まで来ているチャイさんと言う大人の方も私と同じ国の出身です。

私は5才の時に日本に来たのですが、その理由は、私が生まれる前からカンボジア国内で内戦があり、両親はその内戦から逃げるために、隣国タイに難民として避難しました。そのため、私たち兄弟3人はタイの難民キャンプで生まれました。日本に初めて来た時は10月の後半でとても寒かった事を覚えています。日本で最初に生活した場所は『大和定住促進センター』という所でした。そこには同じように難民で来たカンボジア人の人が多く生活しています。食事もお風呂も皆一緒に使用します。そこで滞在期間は約1年で、その間子どもは近隣の学校に通い、大人は日本の生活に慣れるよう、日本語や日本の生活について勉強をします。お父さんの仕事が見つかった人からセンターを出る事になります。私たち家族も父の仕事が見つかったので、センターを出る事になりました。センターを出て最初は同じ大和市内のアパートを見つけ、1年ぐらい生活し、隣の市に外国人が多く居る事を知り、また、父の会社もその団地のすぐ近くにあったので、団地に引っ越すことになりました。団地は大和市と横浜市にまたがっており、全部で84棟あります。私は横浜市側に住んでおりますが、どちらも「いちょう団地」です。なぜ「いちょう団地」と呼ぶかはわかりませんが、団地の周りにはいちょうの木がたくさんありません。秋になると銀杏が道路に落ち、変わった臭いがします。いちょう団地には外国人がたくさんいます。インドシナ（カンボジア・ベトナム・ラオス）、中国、南米（ペルー・ブラジル・アルゼンチン）、スリランカなど多彩です。もちろん日本人も住んでいます。私は小学校1年生からそのような様々な国の子がいる中で中学卒業までの9年間を一緒に育ってきました。

●「すたんどばいみー」というグループをつくって…●

今から約10年前になりますが、当時私は高校1年生の時に、すたんどばいみーと言う「外国人青少年による当事者団体」を地域に住んでいる外国人の子と一緒に作りました。なぜ、このようなグループを作ったかという、私の地域では、日本人による外国

人支援、つまり、一般的な日本語教室ですが、そこは、時間のあるおじさんおばさんがボランティアをするような日本語教室のみで、ボランティアの人の都合が優先されるような教室でした。外国人の子どもたちを主体とした教室、つまり、子どもたちがある場所に集まって、自分たちの企画したイベントや学校の勉強をする、あるいはスポーツをするような場所などはありませんでした。そのため、そのような場所を作ろうと、私と数名の外国人の子どもたちは、自分たちがしたい活動をする、子どもたちの集まる安心する場や、学校や家で起きた事、親との葛藤などをお互いに話したり、共感したりする場所をつくろうと思いました。なぜこのような場所が必要かと言うと、私も含め、地域にいる外国人の子どもたちは、生きづらい日々を送っています。自分たちが外国人であることに引目を感じたり、堂々と自分の名前を言えなかったり、事実、外国人の子どもたちは、自分の名前を日本人にからかわれたりする子は必ずいます。そのことで嫌な思いをする子もいます。また、学校では、家庭の事情を学校の先生はわかってもらえないまま、普通の日本人生徒として扱われたり、その結果、期待しない結果となると、「どうして、あなたはできないのか」と学校の先生に言われたり、学校の国際交流でいきなり民族衣装を着させられたり・・・などです。ここにいる人はこのような事を聞き慣れないかもしれませんが、これらのことは私の住んでいる地域の子どもたちが生きづらいと思っている事です。子どもたちはなんとかこれらの状況を生き延びようとしています。教室の中では自分の学校の状況や家で親に分かってもらえないもどかしさなどを話、また次の日の学校に行き、そうやって私たちは生きてきました。正直、ばいみーがなければ自分はここに居なかつたらろうし、いろんな角度から日本の社会を知る事もなかつたらろうと思います。

●モビリアでの活動を通して…●

2011年3月11日私は勉強をするため、清水先生の家に行きました。すると、突然地震になり、しばらく様子を見ていましたが、揺れはだんだんと大きくなり、「これは、やばい！」と思い、机の下に潜りました。清水先生は地震の状況を知るためにテレビを付け、とても複雑な表情をしていました。特に陸前高田の事を心配している様子でした。そして、その日から約2週間が過ぎ、Edベンチャーの先生方を中心に物資の買い集めが始まり、いよいよ物資を持って陸前高田に行く事になりました。それに伴い、私たちすたんどばいみーも一緒に行かないかと先生方に誘われ、何が起きたのかを見ておこなうては行けないと思い、西岡歩と宮脇英理の私とで先生方と一緒に参加しました。私たちが行ったのは、4月の一番はじめの週でした。はじめて陸前高田を見た時の光景は、なんとも言えなくて、ただただ流れてくる光景に「あ〜」としか言えませんでした。ただわかるのは、普通ではない光景がそこにありました。清水先生や柿本先生は以前にもモビリアキャンプ場を知っていたので、前の光景と今の光景の違いがあったのですが、初めてそこを訪れた私たちは、なんともコメントができない状況でした。私たちは物資を持って行ったものの、もうすでに物がそこにはあって、逆に次々に入ってくる物資を

どのように配給するかに頭を悩ませているモビリアキャンプ場の管理人の方がいました。

その後、神奈川に戻った私たちばいみーは、物資ではない形の支援を模索し、結果、毎週モビリアにいる子どもたちと過ごすために行く事にしました。そしてそれから、4月中旬から、8月の終わりまでモビリアにいる子どもたちと、ばいみーとの活動を続けてきました。その間、勉強や、遊び、工作、調理などをやってきましたが、本当にばいみーのやることはこれでいいのかなど悩む時もありました。この遊びや勉強、イベントが子どもたちの為になっているのかなど考えさせられました。私たちは、神奈川に戻ると自分たちの陸前高田での活動や子どもたちの様子を振り返り、次回に行くための準備などしていきました。スタッフの中で、子どもたちと遊んでいる中、子どもたちからぼつりと語られる、あの時の出来事や親族が亡くなってしまった事などについて、自分はどう向き合えばいいのか、また、その語りにどのように言葉を返してあげていいのかと考えさせられたばいみースタッフもいました。また、ばいみー活動としても、遠い所にいる子どもの支援はどのように可能なかなども課題として浮かび上がってきました。

エイリは、子どもたちの中から出てきた語りを形にしたい事から、7月より、子どもたちと一緒に、3月11日に自分はどこに居て、何をしていたのか、また、その後自分の生活はどう変わったのかを書き留めようと、それぞれの出来事をまとめることにしました。このまとめた事が、将来子どもたちにどのようにして残るのか残らないのか不安がいっぱいある中での聞き取り作業でした。私は、この冊子作りが、将来子どもたちがここにいた者たちとして、何か困った時にお互いを支え合うような関係になって行くことを願います。

ばいみーのモビリアの子どもたちへの支援は、この冊子作りを機に、一旦ここでストップしますが、これで終わりだとも思っていません。また次来る時には、別な形でまたここにいるみんなと何か出来ることはないかを、神奈川に戻って考えたいと思います。この4ヶ月を通して、私はここに来ないと見られない事、聞けない事、事実が事実として語られない事があることを実感しました。そして、次はこの事を私が誰に何を語るのかも考えさせるものとなりました。

西岡歩（中国人）

●自己紹介●

私は、日本生まれの中国人です。今私がなぜ日本にいるかというのと、私の祖母が子どもの頃に日中戦争で中国から帰れなくなり、その40年後に日本に戻ってきたからです。私たちが活動神奈川県の横浜市と大和市の境にある「いちょう団地」には、私と同じ理由で日本にいる中国人がたくさんいます。

私が「すたんどばいみー」に関わり始めたのは中学校3年生からです。その頃は同級生の外国人の仲間と一緒に勉強を教えてもらったり、イベントに参加したりする側でした。高校生になってから今度は小学生や中学生を見ていきたいと思い、スタッフになりました。スタッフになってからは、外国人の子どもたちとそばにいて、たくさん難しさに気付くようになりました。それは、自分の国の名前前で遊ばれたり、国の言葉し

か話せない親と日本語しか話せない子どもの間で伝えたいことが伝えられなくなっていたり、他にもたくさんあります。

私も高校生のときにできなかったことがあります。それは、クラスの人に「私は中国人です」と言うことができなかったことです。中学校までは、クラスに外国人がいることが当たり前だったのに対して、高校になると私だけ外国人という環境に変わり、「中国人です」と言ってどう思われるのかが怖くて言い出せませんでした。だから外国人であることを隠していました。

そんな私が、「すたんどばいみー」で何人（なにじん）としているのかが分からなくなってしまう時もありました。でも、私の親が中国に関係していることを大切にしたいと思ったから、大学に入ったときは、「中国人です」というように決めました。

「すたんどばいみー」に来ている子どもたちの中には、名前でもいじめられたくない、外国人だと思われたくないから、日本の名前に変えようとする子どもたちが増えてきています。私はそんな子どもたちに、高校のときの経験を話しながら「これから何人（なにじん）として生きていくの？」と聞いています。それが今の私の活動です。

●陸前高田の子どもたちの支援を通して●

東日本における大震災が起きてからしばらくして、柿本先生から電話があり、「車で支援物資を届けに行くのだが、一緒に行かないか」と誘われました。私自身、中学校の先生になることを目指していて、この震災が起きた時代を生きる者として、現場をこの目で見て、将来先生になった時に生徒たちに伝えよう、何か必要なことを見つけてこようと思い、一緒に行くことにしました。

車で約600kmの道のりを走って行きながら、地震で壊れた道や建物の修復されたあとをみて、地震の怖さを痛感しました。それよりも、一関から山道のトンネルを抜けた後に広がる津波の被害の風景にはもう言葉になりませんでした。でも、今ある風景はどんどん片づけられていき、津波の被害が忘れ去られていってしまうことにも難しさを感じました。

それからしばらく走って、当時避難所だったモビリアに着き、支援物資を渡すためにあいさつに行くと、すでに届けられている支援物資はもう山積みになっていて、今度は必要なものかどうかを仕分けたり、運んだり、運ばれてきた支援物資が避難所で生活している人たちにとって負担になっていることに気づきました。そこにいた大人は、「支援物資がなくなっても今あるもので生きていく」といつか聞いたことが記憶に残っています。また、子どもたちのためにと持って来たおもちゃやトランプも、子どもたちは何度も新しいものを開け、大切にされなくなってきていることに気づきました。本当に必要なもの、支援はいったい何なのかを考えさせられました。

そのあと、子どもたちと一緒に関わった中で、ある男の子の兄弟は、「お兄さんは兄弟いるの？」と聞かれ、私は「お兄ちゃんがいるよ。」と答えた後、男の子の兄弟は「こいつは弟。あと妹もいる。お兄ちゃんもいたけど津波で流されちゃった。」と言い、私はその時、「そっかあ、、、」としか答えられませんでした。他の子どもたちもなにか「もやもや」している印象でした。私は父や親しい友人が病気で亡くなった経験がありましたが、亡くなったことをどう思えばいいのか、自分でどう整理すればいいのか、ひと段落つくまで3年かかったのに、この子達は、津波でいきなりたくさんの方を背

負うことになったのを考えると、これから大変だなと思ったのですが、私の経験を話すことによって何か残していくことができればいいと思いました。

午後になって、避難所の中では大人たちがミーティングをしていたので、子どもたちは外に出てきたのを見て、きっと、津波で家族や友達がなくなったり、離ればなれになったりしているけれど、家の中でも、友達同士でもそのことを話せなかったり、気になっていたり、整理できていなかったりしているんだと思ったと同時に、親たちも復興に向けて、自分たちの今までの生活を取り戻すためにも、今やるべきことをやっているんだと思いました。でもそうした中で子どもたちの「もやもや」はなかなか相手にされずにいる、この子たちに本当に必要なことはできるだけ「そばにいること」で、津波の出来事や誰かがなくなったことを聞いたときに、言葉が見つからなくても、なにか見つかったときに返していききたい、だから毎週来て、遊んだり、勉強したりする中でできるだけ一緒にいようと考え、それから毎週の週末の活動を続けてきました。

活動では、集団で遊んだり何かを作ったり勉強することを心がけてきました。そんな中でも小学 2 年生の子たちは毎回けんかや言い争いが絶えなかったことが印象に残っています。でも、年上の子たちは下の子の面倒をよく見ていて、何かを一緒にやったり、気を配ったり、とても感心しました。そんな中でも失敗はあります。特に日曜日の朝はセンターハウスでテレビを見始めるとそこから動かなくなってしまい、手を焼きました。

そして、モビリアの活動では様々な節目を迎えました。それは、まず、部活動が始まり、小学校の高学年がやりたいことをやれるようになっていくこと、学校が始まり、新しい学年になれたこと、仮設住宅へ移ることができ、ようやく自分たちの生活を取り戻すことができたこと、そうやって子どもたちの生活が変化していったように思えます。

そして、7 月からは子どもたちから震災が起きたときのことを聞き取り、今覚えていることや感じたことを残して将来に震災のことを振り返ったときの材料にするための活動を始めました。私は特に小学 2、3 年生の子たちとの活動では、震災直後、家族の誰かと離れて生活していて不安だったりさびしかったりしたことが共通していて、震災が起こる前はあまり遊んだりすることがなかった関係だったのが、震災が起きたことにより、モビリアで一緒に生活する中でできた遊び仲間やけんか相手がこの子たちを強くしてきたんだと感じました。

そして、ひとつだけ心残りなのは、兄が亡くなった兄弟と一緒に聞き取りができなかったことです。私の経験になってしまいますが、私は父を 3 年前に亡くしたのですが、そのときに泣くことはありませんでした。というのも父とは酒ぐせが悪く小学 5 年生の頃に離婚していたため、父を大事に思うことはなかったからなんだと思います。でもその分、兄が父の代わりになって悪いことをしたらおこってくれたし、部活も何かわからないことがあったときも教えてくれた。離婚した後の父親の親族との関係もすべて兄が引き受けてくれた。私にとって兄は、父親と同じような存在でもあったことがこの年になって振り返ることができました。父はいつも酒ばかり飲んでいただけで、でも私が今の好きなスポーツでもある卓球は父が教えてくれた。卓球はこれからも大事にしたいと私の中で思っています。こういったことをあの兄弟と話したかったなと思っていました。

今回の活動で終わりを迎えますが、この活動を通して子どもたちのそばにいて感じた

ことは、大変なことを乗り越えることは強くなれるきっかけだということ。でも、一人だけで強くなれないし、そばに居る仲間だったり、協力してくれる大人がいたから強くなれたんだと思います。今度会うときは、たくましくなった姿が見れることを期待しています。また、忘れてはならないのは、震災の教訓です。神奈川県は海に面していて、いつ起きてもおかしくない東海地震や首都圏の直下型地震に備える必要があります。私がここで見てきたこと、聞いてきたことを生かして教師になった時に、防災対策に取り組んでいきたいと思っています。

宮脇 英理（ベトナム人）

●自己紹介●

私は、日本国籍のベトナム人です。私のお父さんは、ベトナムと中国のハーフでお母さんは、ベトナムと日本のハーフです。私は、生まれた時から日本の名前だったので、すたんどばいみーに通うまでは、外国人として意識しながら過ごしたことがあまりなかったです。私のベトナム語は、日常会話ぐらいしかできず、字はほとんど書けません。両親と話すときは、日本語混じりのベトナム語で話し、兄弟といるときは、日本語で話します。

そんな私は、もともと、すたんどばいみーのメンバーで活動していたわけではなく、勉強を教えられている側でした。私は、なんかみんなと違う、日本人の親だったらこんなことないのに、など違和感を持ちながらもあまり考えずにいました。しかし、すたんどばいみーにいて外国人ということを考えさせられます。

私は、ベトナム人、日本人の間でずっと揺れていました。すたんどばいみーの中で、スタッフや周りの子と同じ経験を話す中で、外国人ということ突き付けられます。

すたんどばいみーの本を書く中で、なぜ今ここにいるのかということ考えたときに、私が外国人ということは、私が日本人だと決めても変わらないことであると思いました。

それから、私は、外国人であるベトナム人だということを書いていくことを決めました。

このすたんどばいみーの本は、私の決意の記録であります。

私が、すたんどばいみーで変わってきたことを年下の子たちにもやって、伝えていかないと、今でもスタッフとして活動を続けています。

●子ども支援●

私は、4 月 2 日にモビリアを訪れました。モビリアに着くまでの道は、震災の跡をただただ見ることしかできませんでした。モビリアに着いてから、先生たちと支援物資を届け、子ども達と遊んでいました。

子ども達と遊んでいる中で、男の子が私たちに「もし、好きな人が亡くなったらどうする？」と聞きいてきました。私は、とっさのことでなんて答えたらよいのか分からずに、「ずっと覚えておいて、忘れないことかな。」と答えたら、その男の子は、「いつかは、顔なんて忘れちゃうじゃん。」と私に返しました。私は、なにも答えられずに、ずっとことばを探していました。その後、サラーンや歩からその男の子はお兄ちゃんを亡くしていることを聞きました。

男の子からの質問に答えられなかった私は、この質問をしてきた男の子になにを返したらいいのか、この避難所の子ども達に何ができるか、を考えた時にこのままバイバイではなくて、また来なくてはいけないと思いました。

また、女の子 2 人から「おもちや ありがとう。」と一緒に絵を描いてくれたのをもらいました。私は、感謝されに来てるのではないのに…と思いながらその絵をもらいました。帰りの車で、この子ども達のそばにいたことが、私にできることではないかと考え、それから活動を続けてきました。

毎週の活動で、保育所の子から高学年の子までみんなで遊ぶことを中心に考えてきました。学習も取り入れて始めてみると、やるやるやるとって言って逃げたり、集めて勉強することに苦戦することもありました。活動の中で、子ども達の表情が良くなっていくことに気がつき、子ども達の変化がわかるようになっていきました。遊びの中で、子どものやりたいことを子どもと一緒にやるということもできました。

活動を続けていく中で、学校が始まったり、仮設に移動したりと周りの状況が変わって、それぞれの生活が少しずつ戻っていきつつあるように感じました。

当初と比べて状況が変わっていく中で、7 月の中旬から震災の記録を残すという作業を子ども達と始めました。それぞれの生活に戻りつつある今、もう震災の話はされていないです。私は、子ども達がなぜ今ここにいるのかと考えたときに、私がすたんどばいみーの本で自分の記録を残しているように、子ども達にも記録を残していくことが必要だと思いました。また、将来、読み返したときに 1 つの材料になってほしいと考え、聞き取りをやってきました。

聞き取りを進めていく中で、私は、ある男の子聞き取りの記録と一緒に見返した時に、男の子が「おれ、こんなこと言ってたんだ。」と言っていました。それを聞いた私は、聞き取りが振り返れる材料になっていると感じました。

しかし、私は、お兄さんがなくなった兄弟と向き合って話しができませんでした。私は、好きな人が亡くなったら、思いっきり泣きます。かなしいです。でも、いつか考えられるときに好きな人が亡くなったことを考えます。聞き取りを始めた時期に、ベトナムのおばあちゃんが亡くなりました。私は、考えずに亡くなったことに対して逃げようと思いました。しかし、私は今、逃げるのではなく、その場に立ち止まるのではなく、亡くなった事を受け止めていこうと思いました。そう思えたのは、私の周りの人がいたからです。

私は、この兄弟にやりたいこと考えることを実行して行ってほしいです。一緒にいるのは、兄弟だけではないです。今まで過ごしてきた人たちがいます。私は、この会で毎週来ることはないですが、またここに来ます。

長畑シゲミ（ペルー人）

●自己紹介●

私の名前は長畑シゲミです。ペルーで生まれペルー人です。日本には 8 ヶ月のときに来日しました。日本での生活が長く小・中・高と学校に通い今は、看護師になるために

都内の専門学校に通っています。母国へは今まで 3 回、帰国したことがあります。スペイン語が母国語であり家の中ではスペイン語をしゃべっています。

●すたんどばいみーとの出会い●

きっかけは私が中学 3 年生のときでした。すたんどばいみーには中学生の勉強やイベントを行う中学生教室という教室があり、そこに行っていました。高校受験の時には面接の面接の練習をしてくれたり勉強を教えてくださいました。すたんどばいみーでスタッフとして活動し始めたのは高校 1 年生の終わり頃でした。今まで教えてもらってきた私が、今度はスタッフになって外国人の子どもたちに勉強やイベントと一緒にやることになりました。大変さや辞めたいと思ったことは何度もありますが、外国人の私は同じ外国人の子たちと共有できたりすることもあると思いました。また自分のことを見てきてもらったから同じ様にできることがあるのではないかと感じて活動を続けています。すたんどばいみーはいろんな教室を開いています、私はその中の小学生教室の代表をしています。

●震災支援活動を続けて…●

震災があった日、私は初めて体験する大きな揺れに驚いていたのを覚えています。物は倒れガスが止まるなかテレビでは地震のニュースで埋めつくされていました。津波の映像が流れたときただ見てることしかできず、気持ちは戸惑っていました。自分の住んでいる地域と被災地の被害の違いさに言葉がでなかったです。すたんどばいみーが東北震災支援をはじめたとき、私も行くことに決めました。参加したのは一度、自分の目で見にいきたかったのと震災があったことに向き合うべきだと思ったのが理由です。私以外にも多くの方が募金活動や実際に被災地に行ってボランティアなどを行った人がいます。そう考えたとき被災地に行く前に私は何もしない自分なのか、それとも私なり何かできることはないかと思う自分がいました。力になりたい、何かできりかもしれないと思うことは簡単なことではないと思うし私が被災地に対してする支援が自己満足に終わってしまう怖さもありました。でも少なくとも私は震災が起こったときうまく言葉にできないけれど何かを感じさせ、考えさせる気持ちになりました。この気持ちに自分が向き合うことが支援ということに繋がるのではないかと感じて支援活動を続けてきました。

震災から半年たちテレビで放送することが少なくなってきたと感じます。被災地の方々も復興に向けて自分たちの生活を取り戻してきていることはわかりますがそれと同時に忘れられていくのではないかと不安になることもあります。この震災でいろんな人達がそれぞれ自分なりに受け止め、できることを探していると思っています。私は何度かにわたって被災地に訪れ、子どもたちと一緒に勉強や遊び、デザートなどを作ってきました。初めて来た時は子どもたちの元気さと明るさに驚きました。正直、ここまで元気だとはおもわず初めて会うことから警戒してしまうのでは？と思ったりしたのですが私に声をかけてくれたり名前を覚えてたりしてくれてうれしかったです。震災当時のことや学校、友達のことを話してくれる子もいました。活動を続けていく中で子どもたちと一緒にいられる時間を作っていくことが今の自分にできることだと気づきました。モビリアに訪れるたびに少しずつ風景が変わっていく様子がわかります。瓦礫が片付けられていき、初めて来たときと随分違います。支援してきて私は何をすることができたこと聞かれれば、得るといよりも被災地にいる大人の方や子どもたちに自分がやっている

ことに深く考えさせられ、いろんなことに気付かさせてくれることができました。自分の中で支援することに対してたくさんの葛藤もあり悩むこともありましたが今、やってきて良かったと思える自分がいます。これからは毎週のように来ることはなくなりますが、私は被災地が復興に向かっていくなか子どもたちと一緒に過ごしたことや得ることができたことを忘れずに生活していきたいです。

伊藤 瑞姫（中国人）

●自己紹介●

私は中国生まれの中国人です。私が日本にいるのは、おじいちゃんに呼び寄せられたからです。昔、日本は中国との戦争で負けて、日本に帰れなくて、中国に残された子どもたちを「残留孤児」と言います。私のおじいちゃんもその1人です。その後、何年か後に、中国と日本が国交回復したので、おじいちゃんは日本に戻れることになりました。おじいちゃんは、日本に帰ったあとに、自分の子どもやその家族を日本に呼び寄せました。私も10歳のときに、おじいちゃんに呼び寄せられて、両親と日本に来ました。今は日本に来て7年目で、高校2年生です。両親は日本語が分からないので、私は家では両親と中国語で会話しています。

すたんどばいみに来たのは、小学校5年生のときに、ばいみの中国語教室に行ったのが初めてです。高校生になってから、ほかの教室にも参加して、子どもたちの勉強を見たり、学校や家であったことを話したり、何かあったときには、相談できる相手になって、アドバイスしたり、一緒に考えたりします。

●活動を通して●

初めて東北に行ったとき、町中は何も残ってなくて、瓦礫が一つ一つの山になっている所、まだ片づけられてなく、瓦礫が周りいっぱい、家が水に浸かって、屋根しか見えなかった所など、テレビで見たより現実的で、私にとっては、多分、一生忘れられまい光景だと思います。

初めてモビリアに来たとき、地震で家が流されたり、身の回りの人が亡くなったりしている子どもたちの雰囲気はどんよりして、全然話をしてくれないじゃないかと思っていたが、実際、子どもたちと会ってみると、何かモヤモヤの雰囲気もあるけど、みんなで遊んでいるときは、とても明るくて元気だったので、自分が想像したことと全然違って、驚きました。逆に、そんなマイナスの考えを持っている自分は、この活動をやっているのかと、自信がなくなって、不安に思うときもありました。また、モビリアにいるときの子どもたちは、自分の妹や弟じゃないのに、普通に抱っこしたり、可愛がったりして、本当の家族みたいだなと思いました。だから、今仮設に入って、みんな別々の生活をしていても、その関係を続けてほしいなと思います。

最初は東北に行って何をすればいいのかはわからないけど、取りあえず行って見て、何かできたらいいなと思って行きました。行っても、自分に何が出来るかは、はっきり分からなかったんですが、何回か東北に行って、子どもたちと遊んだり、勉強したり、地震のことを振り返ったりして、子どもたちのそばにいて、彼らが思っているいやなこと、嬉しいこと、悩んでいることを聞いたりして、子どもたちの話を聞く相手になるこ

とができた自分は思います。

この活動を通して、自分は何を得たのか、どこが成長したのかを問われたときがありました。自分はこの活動を通して、得たものもあるし、成長したところもあると思います。だけど、それは何かとまだ、気づいてません。だから、帰ってから、もう一度自分がやってきたことを整理し、まとめて、じっくり考えて、言葉にできるようにしたいと思います。

馬場 有希（日本人）

●自己紹介●

私の名前は馬場有希(ばばゆうき)といいます。私が住んでいるところは、神奈川県の大和市にある「いちょう団地」というところなんです。そこには、収入の低い人、母子父子家庭、老人など、いろいろな課題を抱えている人たちが多く住んでいます。今は一人暮らしをしていますが、家族はずっと住んでいます。というわけで、私もそのいちょう団地の一人です。

いちょう団地には、外国人も多く住んでいます。ここにいるすたんどばいみの人の多くは、いちょう団地に住んでいる、または住んでいた人たちです。だから、私は、ここにいる外国人のみんなと小さいころから学校と一緒に勉強したり、遊んだりして物心つく前から一緒にいたのです。

私は日本人です。日本人は外国人ではないから、外国人が日本で生きる生きにくさや、大変さ、痛みがわかりません。私は、15歳からすたんどばいみに関わり始め、10年目になりますが、それでも、かれらの気持ちをわかりきることはできません。なぜなら、日本人だから、外国人の立場になりきることはできないからです。

すたんどばいみーは、外国人のためのグループなので、日本人はいません。そんなすたんどばいみーに、私は通い続けています。今まで、何人かの日本人がお手伝いをしようとするたんどばいみーを訪れましたが、やがてみんな去っていきます。初めは、「困っている外国人のお手伝いがしたい」と言います。でも、段々と「外国人の問題は自分には関係ない問題だ。」と言って去ります。きっと、自分の生活スタイルや、今までの考え方を変えていってまで、つきあえないということだと思います。私は、そんな人たちに対して「関係ないって本気で思っているのか、外国人がたくさん問題を抱えなきゃいけないような社会をつくっているのは日本人じゃないのか。」と考えています。きっと、そこまで深入りしたくない、「お手伝い」はできても「関わる・抱える」ことはできないのだと思います。

でも、それは「やってあげた」という日本人の自己満足に外国人が付き合わされているだけです。じゃあ、私自身はどうだろうか…。そんな日本人の一人としてかれらとこれからも生きていくのか、そうではない付き合い方があるんじゃないのか、という問いにぶつかりました。

日本人であることも、外国人であることも変えられない事実です。そのことは、地域で、学校で、社会で、あらゆる場面で「差」となって問題化してきます。そのような現

実を前にして、自分は、これからどんな人間として生きていきたいのかと、すたんどばいみーの傍らでいつも考えていました。

今、私は小学校の先生として大和市で働いています。もともと先生になるつもりはありませんでした。けれど、日本人も外国人も住んでいて、たくさんの問題を抱えた(抱えさせられた)自分の住んでいる場所で、やっぱり私は生きていきたい、と思ったから、たぶんこの道を選びました。いちよう団地はほとんど大学進学をしない地域なので、大学をでることは簡単ではありませんでしたが、「やってあげる」という自己満足ではない道で、自分のやり方を探したかったのだと思います。

今は、学校の中にいるので、自分が関わるクラス子どもたちに自己満足日本人にならないような、ほかの力をつけられるように、今いる場所で自分の幅を広げていくことが、今の自分の課題です。

これからも、私はすたんどばいみーという存在を自分の正面において、どこまでどう関わられるのかと問い直していくのだと思います。問い直す作業の中で、教員という道に進んだように、これからも次の道を見つけていきたいと思っています。

●モビリアにくるようになって●

陸前高田市(モビリア)にくるようになって、震災は一言では言えない、一面では見えないということを知りました。

初めてきたのは、五月でした。大きな建物も何もかも流され、ぐちゃぐちゃになった光景は、私が神奈川で報道を通して震災を見てきた光景とは全く別のものでした。同じ日本の中で同じ時間軸の中で生きているはずなのに、震災の被害の大きさ、そこにある一人ひとり、一家族ずつの生活が流されたということを、ここにきて初めて感じたと思います。ここにこなければ、震災のこと、正直わからないまま、今後の人生を過ごしていたと思います。

私は神奈川という場所から週に一回だけきて、簡単なことは言えないし、簡単に心を感じることはできません。けれど、忙しそうなお大人たちの横で、たくさんのおもちゃやお菓子を手にして時間をつぶすように過ごす姿を見て、週に一回だとしても、人との中で過ごす時間を確保できればと最初のころは思っていました。朝から夕方まで子どもたちと遊んだり、勉強したり、時間を共有する中で、一人ひとりの震災があることを知りました。単に、被害とか復興という言葉ではなく、今ここに至るまで、一人ひとりが見たもの、感じたもの、心にあるものを無視して、子どもたちと付き合っはいけないのではないのかと思うようになりました。

私は主に、小学校の1、2、3年生のみんなと関わってきました。小学生たちは、自分たちの中ではやっている遊びをひたすらやったり、私たちが教えた遊びを自分たちのものにして遊んだり元気いっぱいです。そんな中でも、今までにおこった出来事を、見た通り、記憶にある通り、ぼそぼそと話をしました。途中、初めて声にした出来事もあったと思います。不安な気持ちも言葉と一緒に声にして、それでも、話を途中でやめなかったのは、かれらにとって心の中にあるすごく大事なことだったからだと思います。

低学年の子ども達がかいた、なぜ自分がここにいるのかという「今ここにいたるまで」の地図は、気持ちや思いを言葉にとどめるためだけじゃなく、いつか、もう少し子どもたちが大きくなって、震災を別の角度から整理したり、振り返ったりするときに、今残

した言葉が一つの引出となるかもしれないと思います。それは、もうちょっと大きくなってからかもしれないし、もっと先かもしれないが、「今まで」や、「今」が言葉として自分の中に残っていれば、次どう進めばいいのか、選択していけばいいのかが、みえてくるかもしれません。その時に、自分一人ではなく、一枚の地図の上に何人もの「今ここにいたるまで」があったように、となりにいる、一緒に過ごしてきた友達とつながって行ってほしいと思います。

神奈川で5年生の子どもたちに「なぜ行くの?」と聞かれたとき、「自分の目で確かめたことが本当のことだと思うから、本当が知りたいからいってくる。」と話をしました。ここにこなければ、きっと支援とか節電とか単純なことに対して「いいこと」と思って疑問を抱かず、自己満足のやり方しか知らない子どもを育てることに大いに加担していたことと思います。私は、自分なりに知ったことがある上で、次はどうしていくのか。私は私のいる場所で、この震災と関わっていかなければならないと思います。神奈川の小学生が今すぐにできることを探し提供するのではなく、次の社会をつくっていく子ども達に、正しい目と正しい力をつけていけるようにしていくことが必要です。



今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援 (エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン)

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp



独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業